# 設計者としての樹木医

株式会社 日建設計 ランドスケープ設計部 佐藤　勇

## きっかけ

私は建築設計事務所のランドスケープ部門に所属し、日々建築を取り巻く外部空間の計画・設計・監理に携わっています。一般的な地上部の植栽のほか、屋上緑化、壁面緑化、ビル風、極陰地などさまざまな好ましからざる環境条件における植栽のノウハウが求められる業界です。また、計画地に元からある大径木を建築計画にあわせて移植して使うことを求められることもあります。そういう意味では幅広い緑化の知識や経験が必要であり、樹木医としての知識を獲得することはこれに大いに役立つだろうと考え、樹木医の取得を目指すに至りました。

加えて林試A法による移植に出会ったことも樹木医の取得を目指す大きなきっかけとなりました。それまでは移植には強剪定が付きものだと思い込んでいましたが、それとは正反対のやり方で、科学的にも説得力があり、木にも優しいこの方法があることを知った時の感動は忘れられません。その後、やむを得ず真夏の現場で移植をする機会がありましたが、納得できる結果を得ることができました。

## 試験のこと

試験対策は、あれもこれもと勉強の範囲を広げるゆとりもなく、『樹木医の手引き』の読み込みに絞った勉強を行いました。あの分厚い本を読むだけではどうしても頭に入らないため、書いてカラダで覚えるように努めました。また、論述問題は限られた時間の中で明快さをもって書き上げる必要があるため、回答のストーリー立ての練習や文章の肉づけに必要なキーワードの把握を行うとともに、時間内に仕上げる訓練も必要でした。すでに試験勉強から遠く離れている身にとっては効果的だったと記憶しています。

## 変わったこと

資格を取得して３年余りが経ちました。今では、設計業務の中で、樹木医として移植適否の判定作業を行う機会を少しずついただくようになりました。それまでは外部の樹木医さんに委託していましたが、自前で行うとなるとやはり責任の重大さを感じない訳にはいきません。

また、多くの方がそうであるように、周囲の見る目が大きく変わるのを実感します。樹木医は何ができるのか、どのようにして資格を取るのか、とよく質問され、樹木医という資格に興味をもつ方が多いことに感心する一方、自分には実際何ができるのかと自問させられます。そのたびに継続的な研鑽を積み重ね、実力と自信をつけていくことが大切だと、筑波研修の際に言われたことが思い出されます。

## これから

仕事への取組方、ものの見方も変わりました。木に生えるキノコひとつに目が自然といくようになるし、樹木の材料検査においても、形状寸法の満足や姿かたちの美しさだけでなく、生育不良箇所のチェックも積極的に行うようになりました。そしてデザインだけでなく、目に見えない部分ですが植栽基盤への意識も以前より強くなったと思います。

今後は、設計者としての樹木医に何ができるのかをさらに突き詰めていきたいと思います。それは植物にとっての良い環境づくり、すなわち良い設計に努めることにほかなりません。おそらくは標準設計にとどまらない何かを付加できるノウハウなのだと思いますが、樹木の生育不良をできるだけ予防するための引き出しをたくさんもつことができればと考えています。